

# 小脳虫部にみられた Atypical Teratoid/Rhabdoid Tumor の 1 例

林 博之<sup>1)</sup>, 青木光希子<sup>2)</sup>, 大川 将和<sup>3)</sup>,  
継 仁<sup>4)</sup>, 野村 優子<sup>5)</sup>, 高野 浩一<sup>6)</sup>,  
井上 亨<sup>3)</sup>, 鍋島 一樹<sup>1,2)</sup>

<sup>1)</sup> 福岡大学病院病理部    <sup>2)</sup> 福岡大学医学部病理学教室    <sup>3)</sup> 福岡大学医学部脳神経外科  
<sup>4)</sup> 福岡赤十字病院脳神経外科    <sup>5)</sup> 福岡大学医学部小児科    <sup>6)</sup> 福岡大学医学部放射線科

要旨：Atypical teratoid/rhabdoid tumor (AT/RT) は小児期の稀な脳腫瘍で、同じく小児脳腫瘍の代表である髄芽腫とは臨床病理学的に類似性がみられ、しばしば診断が困難である。われわれは、髄芽腫の好発部である小脳虫部に発生した AT/RT の 1 例を経験したので報告する。症例は 0 歳 9 ヶ月の男児で、繰り返す嘔吐がみられ受診した。頭部 CT および MRI では、小脳虫部の腫瘤、閉塞性水頭症および複数の播種を指摘された。髄芽腫の臨床診断にて、腫瘍全摘が行われた。腫瘍組織には、好塩基性で暗調な領域と淡く好酸性で明調な領域を認めた。前者は、クロマチンに富む小型核を有し、細胞質の乏しい髄芽腫類似の細胞からなり、後者は、核小体の明瞭な水泡状核と淡明な細胞質を有する細胞からなり、大細胞髄芽腫に類似していた。一部に好酸性の胞体を有するラプドイド細胞も見られ、凝固壊死巣や石灰化を伴い、多数の核分裂を認めた。大細胞部分を含む髄芽腫および AT/RT が鑑別として考えられたが、免疫染色で cytokeratin AE1/AE3, glial fibrillary acid protein (GFAP) および epithelial membrane antigen (EMA) が陽性で、INI1 陰性を示し、AT/RT を支持する所見であった。本症例で、INI1 免疫染色が髄芽腫との鑑別に有用であった。

キーワード：AT/RT, 小脳虫部, 鑑別診断, 髄芽腫, INI1